

2020年・降誕主日

「今日、救い主がお生まれになられた」
ルカ2：1～20

(1)
日本の最初のクリスマスは、1552年、山口市内の宣教師館で祝われたといえます。宣教師「コメス・デ・トルス」が、司祭館において日本人信徒を招き、クリスマスの祝会を催し、夜を徹して神を賛美し、翌朝、ミサに与り(あずかり)、説教を聞いたのち、全員に食事がふるまわれたとの記録があります。460年も前のことです。降誕節を迎えて、北海道から沖縄にいたる諸教会において、今朝聞いたルカ2章が拝読されていると思われます。なかでも、ルカ2章11節は、クリスマスの中心的意味を汲み取れる「GREAT TEXT」と言わなくてはなりません。

とこの中で、日本の年の瀬の恒例行事の一つといえは、ベートベンの「第九」の大合唱でしょう。「父はいましたもうか」「・」創造主はいましたもうか」「いや、■聖空のあなたに創造主はおられる」「友よ、天地を造られた神を喜ばうではないか」「フロイデ・フロイデ」という大合唱が日本中に響びわたります。まるで、一年のチリアクタを振り払う儀式でもあるかのようです。しかし、クリスマスが終わると、周辺の様子はガラッと変わります。寺のコーンという響きと共に、新たな年を迎え、4000万の人々が、初詣に神社

に足を運びます。その時になれば、「創造主」「天地を造られた神を喜ぼう」とあれほど讚美したことなど、すっかり忘れ去られています。こうした変わり身の早さを、毎年、日本人の多くは身に付けてきました。

今年もまた例年の如くクリスマスを迎えました。年中行事ではありませんが、それでも、いつも同じ気分・同じ雰囲気を迎えてきたとはいえませぬ。わたし自身は、60数回目のクリスマスを迎えました。言葉で言いつくせないほど喜びにあふれて迎えたクリスマスがあります。けれども、多くの場合、何気なく通り過ぎたクリスマスでありました。周囲の者たちが、「MERRY CHRISTMAS」と挨拶を交わしているかたわらで、一人淋しく過ごしたクリスマスもあります。

しかし、私たちの現在の気分や調子がどうであれ、悪性「コロナ」の影響が蔓延した年ですが、それでもやはり、今朝、「ルカ2章11節」の御言にしっかりと目をとめておきたいと思えます。降誕主日を迎えるまでの「アドベント」「礼拝があります。」「アドベント」とは、「アドベンチャー」「冒険」と関連した意味があると言われます。クリスマスとは、主なる神さまがとんでもない「アドベンチャー」「大冒険」をなされた出来事でした。

(2)
ルカ福音書の2章11節を見ますと、「きょう・・・あなたがたのために」

とあります。「キキウ」とは、「いま」でもありません。

なかには、「キキウ」、「はじめてクリスマス礼拝に参加した方がおられるかもしれませんが。」

ギリシャの諺に、「チャンスは前髪でつかめ」と言われています。同じチャンスは、なかなか巡ってきません。「キキウ」がチャンスと思ったら、急ぎ前髪をつかまねばなりません。

しかし、多くは、「いま」は勘弁してください、「いずれは・・・」「と、ズルズルと先延ばしにしがちです。「キキウ」という日・「いま」という時」をおろそかにしてはならないのです。「今は恵みの時、見よ、今は救いの日」(②コリント6：2)であります。

2020年12月20日、クリスマスマスの礼拝に与っている「いま」が大切なのであります。

マタイ福音書の1章をみますと、来るべき救い主は、「インマヌエル」の成就者として誕生すると預言されています。次いで、2章には、はるか東方のペルシャ、今の「イラン」のあたりから、はるばると訪れてきた博士達が登場します。「救い主としてお生まれになったかたはここにおられますか」と、彼らは尋ねています。

ところが、ルカ福音書においては、様子がかかる違います。当時の人々がまったく気づいていない、ユダヤの片隅も片隅、ベツレヘムという片田舎に起きた出来事であると記しています。

「救い主はここ・・・」と尋ねる者に対して、ルカ福音書は、「ユダヤの、「ベツレヘム」の、「家畜小屋」の、しかも、「飼い葉桶の中に臥せているみどり子」が、「救い主」であると指し示しています。幼子が暖かい毛布に包まれて「ゆりかご」の中に臥せているのではありません。「家畜小屋」の「飼い葉桶」の中で産まれたというのであります。

わたしたちは、少々、西欧のロマンティックな聖画を見慣れてきました。あらためて、「馬小屋」がどこどころであるかは説明を要しないでしょう。家畜小屋の飼い葉桶の中に産まれた「みどりご」こそが、御民イスラエルの待望してきた、いえ、世界の人々の待望すべき救い主であると、ルカ福音書は指し示しています。

それにしても、「救い主」なるお方が、「飼い葉桶に生まれた」と言われれば、それはあまりにも、わたしたちの意表を突く、いえ、意外であり、奇想天外ともいえる神の救いの「計画」ではないでしょうか。とつして、クリスマスマスの出来事は、次々と意外な出来事が続くのでしょいか。

「見よ、飼い葉桶に・・・」と書かれただけで、多くは「ええっ・・・」と腰を引き始めます。さらに、最後は犯罪者として「十字架」に架けられたのです。しかも、そのお方を、世界中の約13億ともいわれている神の民が、「主の主・王の王」と讃美をなして、

幼子の御前にひれふし礼拝しているとなれば、驚きで「ころの話ではありません。」

(3)

あと数日で、2020年が終わろうとしています。一年間、「まさか」「まさか」の連続でした。悪性コロナの影響は全世界にまで広がり、いまだ多くの国は試練を受けています。

にもかかわらず、それでも、「きょうダビテの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです」との御言の前に、神の御子の誕生を互いに喜び、喜び分かち合いたいと思います。喜びは分かち合う時に倍加します。

朝日新聞の「読書欄」に、まるで、O・ヘンリーの短編小説でも読んでいるかのような旅行記が目にとまりました。「森本順子さん」という方の投稿した「ブラリ、米国旅行で出会った人情記」です。この方が、独身か、既婚者かは分かりません。12月23日の朝、どういっわけか、彼女は、突然、思い立ってニューヨークに旅立ちました。24日にニューヨークに着き、市内を一人でブラブラとアチコチ歩き回し、ミュージカル、オペラ、コンサートと、片っ端から、市囚の劇場を巡り歩きまわった。

次の日は、クリスマスです。店という店は、全て戸を閉めて静まりかえっています。外出できず、一日ホテルの部屋でテレビを見ていたうちひすが、い

つか夕方になり、早めの夕食をとるため、ホテルのレストランに出かけました。クリスマス当日というのに、連れもなく、一人ポツンとレストランの片隅で食事をしていた彼女に、レストランの「ウェイター」は、何かと彼女に気をつかってくれたようです。夕方になるとレストランは次第ににぎやかになりました。夕食を済ませてから、レジで勘定を払おうとした時、ウェイターが、「お勘定はあの向こうのテーブルに座っている紳士が既にお支払い下さいました。」というではありませんか。

見知らぬ人から好意は受けとれないと言いますと、「実は、あの方は、この店の常連です。毎年、クリスマス当日に、一人で食事をしている方を見かけると、接待されてきました。心配はいりません。彼の好意を受けて下さい。」と言われたのです。丁度その時、食事を済ませた紳士が側に来ました。それで、彼女は軽く会釈をしました。すると、「機会がありましたら、また会いましょう、see you again」と、ステッキ片手に、その紳士は名前も告げずに立ち去ったというのです。

すると、ウェイターが「MERRY CHRISTMAS TO YOU」や「HAPPY」しながら声をかけてくれました。それで、森本さんも、思わず、嬉しくなっって、「MERRY CHRISTMAS AND YOU」や「返ったよ」

のです。ただ、一人見知らぬ街で、淋しさを覚えていた時、思いがけない人から好意を受けた森本さんは、何ともいえぬ喜びで心が一杯になりました。店から出て、ニューヨークの街中を、あてもなく、アチコチ歩き回りながら、出会う人、お一人お一人に、

「MERRY CHRISTMAS TO YOU.
MERRY CHRISTMAS TO YOU.
MERRY CHRISTMAS AND
YOU」と、声をかけていました。そのような思いをいだきながら、わけもなく、ニューヨークの市内を歩き回ったというのです。

わたしにも、思い出深いクリスマスがありました。神学校の最終学年を迎えていた時の一人寂しく迎えたクリスマスほど、思い出深いクリスマスはありません。仲間の神学生たちといえ、郷里でクリスマス・正月を迎えるため、それぞれが帰っていきました。しかし、わたしは家に帰るに帰れず、神学校の自室に一人残っていました。うなぎの寝床のような建物の一番奥、しかも、北回きの日が当たらない、暗くて、すきま風が入る、寒々とした四畳半の部屋の小さな窓からみえる、一本のイチヨウの樹を、いつまでもひとりの見つめていました。

夏には枝葉を四方に伸ばし、その偉容な姿を誇っていた銀杏(いちちょう)の大きな樹でしたが、いまや、葉のすべてを落とし、冬木立の姿を、コバルト・ブルーの澄んだ大空を背にして、

そびえ立つ銀杏の樹になり、それが、その時のわたしの唯一の慰めとなっていました。その一年前、思いがけない交通事故に遭い、心身共に深く病んでいた時です。いまや、家に帰り、父母になさけない自分の姿を見せたくありません。落日目になると周囲の目はきびしくなります。再起不能ではないかと思定められていたとすれば、ますます孤立を深めています。

一人部屋に閉じこもり、辞書を引き引き福音書を読み進むうちに、その日が「クリスマス・イヴ」であると感じていた日の夕方、ルカ福音書の一章から2章を読み始めました。

ΛΟΓΙ ΕΙΣΗΧΘΗ ΝΗΜΩΝ
ΘΗΕΡΟΥ ΟΥΤΩΝ ΟΣ
ΘΟΥΝ ΧΑΡΙΤΟΣ ΚΟΙ
ΟΣ ΕΝ ΡΟΛΕΙ ΔΑΥΙΔ
(オティ エテクテエイ ウミン
セイメロン ソツテイル オス
エステイン クリストス クリオス
エン ポレイ タウイダ)ー、そここ
は「*uinn*」(ウミン)とあるでは
ありませんか。

この「あなたがたのため」と訳されている箇所をじっくり見つめている内に、「あなたがたのため」「は」「あなたのため」「となり、」わたしのために」となりました。

神学校の寒々とした部屋に一人残らざるをえなかった、情けない、惨めな、「この・わたしのために・今日・救い主が・お生れになられた」との理解に

導かれたのです。

さらに言えば、「あなたがたのために」とは、「この世で・悩み苦しんでいるあなたのために」でもあります。人の悩みを、「分かる・分かる」などと安易に相槌を打とうものなら、「あなたなんぞに分かってたまるか……」と反発されるに違いありません。悩み・苦しみは、その人固有のもので、他人があずかり知れるものではありません。分かったとしても、ほんの一部にすぎないと心得なくてはなりません。

マヘリヤ・ジャクソンの「誰も知らないわたしの悩み」という有名な「スヘル・ソング」があります。その最後は、「BU-TUES」で結ばれています。「BU-T」とは、「ただ」であり、「しかし」であり、「にもかかわらず」でもあります。主イエスさまだけが、「ただ」・「しかし」・「にもかかわらず」わたしの悩み・苦しみの全てを「存知のお方であると言われているのが、この「BU-T」です。

自分ほど不運な、不遇な、不幸な、星のもとに生まれた人はいないと思っ込んでいる人がいたとしても、「BU-TUES」と言わねばなりません。

「インマヌエル」の成就者としてお生まれになられたお方は、「弱いものかたわらに、身をかがめ、身を低くして、いつもわたしのそばにいてくださるお方」です。「いねまはれこへく」・「クッ

ド・ニューズ」・「福音」ではないでしょうか。いかなる「貧しい」・「寂しい」・「しらみ」・「苦しみ」・「惨めさ」・「はずかしめ」のなかにあろうとも、「あなたがたのために」、いえ、「あなたのために」、そしてなによりも、「この惨めで、寂しい、孤独な、寄る辺ない」わたしのために、「きょう、救い主がお生まれになった」とルカ福音書は告げます。

肺ガンを患い42歳という若さで召された「原崎百子」さんが残された詩があります。

「わたしが共にいる。治らなくてもよいではないか。わたしが共にいる。長い患いでもよいではないか。わたしが共にいる。何も出来なくてもよいではないか。わたしが共にいる。それでよいではないか——、ある晩、キリストがそう言ってくださった」というのです。

初代教会のキリスト告白と言われている。ピリピ書2章には、どこまでも、深く身を低くされた主イエスの告白がなされています。

「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしくして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高へ引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。それは、イエスの御名に

よって、天上のもの、地上のもの、地の下のものなど、あらゆるものがひれをかがめ、また、あらゆるものが、『イエス・キリストは主である』と告げ出し、栄光を父なる神に帰するためである」(ルカ2:11)。 かつ、

ルカ2章11節の真の意味が分かれず、「MERRY CHRISTMAS TO YOU、MERRY CHRISTMAS TO YOU」と 祖国世内中を回るように、一人一人に挨拶したくなるのではないでしようか。「あなたがたのために」「あなたのために」「このわたしのために」「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛したかった」のです。

【祈りませう】

父なる神さま、降誕節にあたり、ひとり子を賜わった神の愛の深さ、高さ、思いを潜めて感謝します。主イエス・キリストの名によって祈ります。

「アーメン」